

樹の木霊にこころ傾けて

はたして、**孵（かえ）**すべき、……なのか？

蛇口から…、グラスに注がれた無数の一滴が孕む、これら（おののき）の波紋を。

…かりそめの誘蛾灯に生を委ね夜の太平洋西端に地球を浪費し**光綾**^{あやと}取る列島模様を描く……

エンドレスな

フレンドレスたちに。

水源地の湖底には
息を止めたまま今なお
かつて暮らした風景が
立ち尽くしている

それはつい先だったのことのよう…

けれども

虹

の

吊り

橋

を

渡り来る

年老いたテンカラ釣師の記憶では…

半世紀以上も

昔の記録とはいえ

わが年輪にとって

うたかたの宴

土手のヨモギたちは、フィトン・チツドの**狼煙**を上げ

（のろし）

「水ノ・溢レ、水溢レ」と、溪一帯を**忌地**化していく

（いやち）

草木、虫そして鳥や動物たちはそれぞれの流儀で感受し**以身**伝心しつづけ、やがて静かでのどかな景色のまま、

水の世界と／＼空気の世界とが、

非劇的に…逆／＼転、してゆく。

足あるものたちは、倒けつ転びつ、退き
羽あるものたちは、軋らせ、飛びすさり
溪の記憶を脱糞して水に流し、後にする

(こけつ まろびつ)

(きしらせ)

(たに)

はたして、銀化(ぎんけ)すべき、……なのか？

沢尻から…、遙かな大海に注がれて無数の一滴を孕むこの(旅の断念)の岸边で。

…悠久に山・川・海を歩き来し、あるいはマチャプチャレに化身し、津波を招きも
する冷血な…:

生き証人の
化石として。

エンドレスなホモ・ルーデンスが山の(神)を売り飛ばしたと、風は触れて回る
おお！、神無月の神之川、ダムまたダムに阻まれ惑う、下り山女魚か銀化マスよ
この溪は、徒に深い文明資料棺となり果てよう。深いダム底に銀化がいたズラ:
山の(神)と交わした「千年の命」は反故となり、五百年銀杏の生は了しがたく
不意に！断たれ、ルーデンスの反吐は下流域都市の青山(せいざん)に流れ下る。

川風に青ノロの香り褪せた身狭^{むさがみ}上川、淵野辺の岩瀬に若鮎のやせ衰えて横たわる。
河水、黄土の濁り十日余に及び、水の輩(ともがら)たちはみな水底、岩陰を離れ
何かしらを断念し、いずこかに消え、滑石の食み跡は泥の膜に覆われている。青ノ
口は、百代の過客を見送り河清を待つ。

そして、も、掬(すく)うべき、……なのか？

土埋木の(わななき)を、……いま沢水として流れ来、せせる、そのせせらぎを。

…新たに地の者となり、いのちの連禱に共棲し、沢に寄り添い岳(やま)・溪の贈
り物を…

控えめに

いただく

人たちに。

源流では切り倒された老樹の根が今も、自らの死を識らず苔むして息づいている。
灰白く濁る「三岳」を沢水で割り、鯖節で煮付けたツヤブキに至福の時が流れ寄る。
一人の旅人として甘受する三種の神気宿る屋久の酒・水・ツヤブキ。幾筋もの流星
が走る、一湊白川の夜空。(利き水)人は沢水を採取して、ケミカル…だけでなく、
波動解析も試み、それは水に流された叫びを復号する過去への行脚となつてゆく。
知は非知の領土を踏査するに適わず、解析装置はゴクラクハゼのヒゲにはしかず。

吉利さんの屋久島焼で「三岳」を飲むと、珊瑚礁を浮遊しているわたしを発見する

酒で頭をやられてみりやさ
古い皮質がよみがえるのか

この「わたし」は…その時、そして今なのだが、

風海に蛍光を発しざわめく夜光虫であり

縄文杉を前に右繞経行する霊長類であり

大川の滝に身投げするカワセミ属であり…

(うにょう きんひん)

のり移り、憑かれ、まぼろ視、そら聴、錯語して…みみ 軀を通過し屈折する言の葉なき
小枝にぎくしゃくするこしゃくな尺取り虫か。

濁り水の湖底に直立し続ける蠟化した若木たちよ
朽ちて土に還ることもできず苔むす土埋木たちよ
かつては空を、今は水面を見上げる聖老人たちよ

(ろうか)
(どまいぼく)

半世紀前の昔、

この吊り橋は天空にゆらぐ渡り路であり
目がくらむ谷底で沢は細く煌めいており
神業を受け継いだわたしは荒瀬の石陰に
木化け石化けしてテンカラを振っていた

(きら)

そしていま、

湖水の波紋は、山背の「おふれ」を孕みはしない
立ち枯れた多くの樹幹は一服の山水画となりはて
神託を封印したかの聖老人は、深く瞑目している

(はら)

霊移しの儀式は忘れ去られ、縄文・弥生以来の記録が断ちきられた神代杉伐採の後
根が吸いあげた水を自らの死に水と、樹霊の Dying message を受容して地に還る。
とめどなく発露した結晶水は、はたしてどんな vibration (霊気、動揺) を醸して
いるのか、……

こころ傾け、寄り添ってみる

ひとの五感は五悔の始まりであり

第六感の暗号キーが不可欠なのに

女の勘は想像力に頼りすぎていて

……

大慈風の如き「悲母」たりえない

凝結する

はじめの一滴よ

父／母具有のガイネーシスとして

うつむくものの まなざしを

深く 受け／返す

虚心の水鏡であれ

蝶の羽ばたき／こころの波立ちに

ふるえるうぶ毛と共に

はじける朝つゆであれ

命の息吹／孕む *medium* として

やわらかにしなやかに

ふるえる夜の霧であれ

汝ら

無数の一滴が寄り添う水を

無心に飲むことはできない

黄金色のスピリッツを注ぎ

鎮めるものを静めなければ

……

すでに、

わたしは夜ごと、夢の中薄暗い景色の中で身動きできず立ち尽くす時間が、次第に

延びていることを 知っている。やがては、千年の眠りの中

このまま立ち尽くすものとなるのだろうか（わからない

けれども）眠りから醒めた、その時

自分がどこにもいないことを

識る、のだろうか？

（媒介）